
性別人間と食人鬼

凧金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

性別人間と食人鬼

【NZコード】

N3651BA

【作者名】

嵐金

【あらすじ】

性別人間こと、安藤未来。そして、未来の秘密を知る数少ない人間、日比野綾子。

実は、綾子にも、誰にも言えない秘密があつた。

性別人間シリーズ6作目。前作「性別人間と幽霊人間」を読んだ方がわかりやすいと思います。

プロローグ

この世には、世界中に、妖怪や妖精の話がいっぱいある。地域によって、その風習や姿形は様々あるが……

俺は唯一、吸血鬼なら、その説明ができる。

人間の血を吸う鬼と書いて、吸血鬼。

魔王 カラスがいることにより、人間界にいる吸血鬼の数は増加傾向にある。

……現に、俺も一度や二度、襲われた経験がある。

だが、そんな中、俺はついに出会ってしまった。

人間を血を吸い、ましてや、肉や骨すらも食す 食人鬼に。

今回は、鬼になってしまった友人と、自らの使命と戦う鬼の話。

異変

「綾子！！誕生日おめでとうーーー！」

今日、6月15日は、綾子の誕生日。

私は朝、綾子に会うなり、いつもの綾子に負けないぐらいの大声でプレゼントを渡した。

前から綾子が欲しいとボヤいていた、ヘッドフォン。多分、喜んでくれるだろう。

「未来、私の誕生日知つてたの？」

「当たり前じやん、親友でしょ？」

綾子は、私の性別の事を知る数少ない人間であり、そのことを知つても、私から身を引かなかつた数少ない友人。

私が、クラスメイトに性別の事がバレてしまい、落ち込んでいても、真っ先に綾子が励ましてくれた。

私にとつて綾子は、まさに、本当の親友と言える存在だ。

「そつか……私も、もう一ヶ…ありがとう、未来。」

だが、その日の綾子は、どこか元気が無かつた。

「綾子、今日、元気ないけど、何かあつた？」

「え？……いや、別に、なんでもないよつ。」

綾子は、私が差し出したプレゼントを受け取ると、中身を確認した。

「えつと……お、これは……私が前から欲しいと思つていたヘッドフォンじゃないか！ありがとう、未来！ーーー！」

綾子の顔に笑顔が戻つた。

「喜んでくれて嬉しいよ、綾子。」

でも、私は見逃さなかつた。……綾子は、作り笑いをしていた。

一体どうしたというのだろう…？

「田比野さん、誕生日おめでと！」
「まわー。」

直後、夏子が綾子に紙袋を渡してきた。

「夏子、ありがとー。」

綾子は作り笑いのまま、それを受け取った。 そのことに、夏子は気付いていない。

「田比野さん、確かに、17歳になられたんですね？……いいです
よねー、私、実は早生まれなので、まだ誕生日は先なんですよー。」

「夏子、誕生日いつなの？」

「2月です。」

「へーえ、じゃあ、私も未来も、先にお姉さんになつやつたわけ
だー。」

綾子は面白うしくしゃくしゃと夏子の頭を混ぜた。……夏子の身長は私と綾子よりも若干低いため、十分すぎるほど絵になる。
「や、やめてくださいよ、田比野さん。」

夏子は両手で綾子の手を抑えた。

「あははっ、『めぐめぐめん』……わーい、夏子は何をくれたのかな
ー？」

綾子は紙袋の中身を確認する。

「おー、これって……マフラー？」

「これから季節にどうかなーと……。」

「これから季節って……これから夏だよー？」

「で、でも、あと4か月も経てば寒くなつてきますし……。」

夏子なりのサプライズのようだったが、綾子にはやつぱと思えなかつたようだ……。

「あははっ、夏子、結構ドジっ子なんだねー。」

「え、いや、そういうつもりじゃ……。」

夏子は”どうしよう”とこう感じで私を見ていく。……血業自得だが、私にはどうしようもできない。

綾子はとても喜んでいた。……私がわかる、作り笑いで喜んでいた。

今日の綾子は、どこか無理をしているように見えた。
何かを隠しているのだろうか?……でも、一体何を?

その日は特に何事もなく過ごせた。

そして、次の日、日比野綾子は学校を無断欠席した。

訪問

「安藤さん……日比野さん、どうして休んじゃったんでしょ?……しかも、無断欠席だなんて……。」

夏子のテンションは下がりきついていた。

「だよね……綾子の家、行ってみる?」

「そうですね、行つてみましょう。何か事情があるのかもしれませんし。……連絡の一つも無いなんて、おかしいですもん。」

というわけで、今、私と夏子は、綾子の家の前にいる。

綾子の家は、紅丞さんの家よりは小さいが、私の部屋よりは広い……いわば、普通の一戸建て。

古くもなく新しくもない家のインターフォンを押す。 ピンポンという音が、こちらにも聞こえた。

「……出ませんね。」

「そうだね……おかしいな、てっきり風邪かと思つたんだけど……。」

そう言いながら、何気なく、扉のノブを回す、すると

「……鍵かかつてない……。」

「え? ……何かあつたんでしょう?」

「わからない、入つてみよ!」

綾子の安否が急に心配になつた。

私と夏子は部屋に入り、真っ先にリビングに向かつた 部屋の構造は、私が知つていたので、すぐにリビングにたどり着いた。

中の光景は、酷い状態だった。

まるで空き巣が入つた後のような状態。……棚の物がすべて散乱し、

部屋の隅には割れた皿の破片が散らばっていた。

「な、なんですか、これ…一体、何が…。」

夏子はあまりの光景に言葉を無くしていた。

「……夏子、綾子の部屋に行くよ…。」

途端に、綾子が心配になり、私は綾子の部屋に走った。

部屋の前にたどり着き、扉を開けようと手を伸ばした　その時。

ガタン…！

まるで、大きな箪笥が倒れた時のような、物凄い音、そして

「うわあああああ…！…！」

綾子の、叫び声が聞こえた。

「綾子…！どうしたの…？綾子…！」

「田比野さん！？どうしたんですか！？」

事の重大さに気付いた私と夏子は、同時に扉を叩いた。ドアノブを回すが、鍵がかかっているのか、開かない。

「夏子、ちょっと離れてて、蹴破るから！」

「えつ、でも…」

「今頃、中は大変なことになつているかも知れないでしょ…？四の五の言つてられないよ…。」

私はドアから間を置き、壁を背に、勢いをつける。そして…：

「ついやああ…！」

その場で横に1回転し、扉に蹴りをかました。
ガタン…！…という物音と共に、扉が開いた。

中は、リビング以上に酷い状態だつた。

色んなものが、原型を留めなくなつていて。…見たことはないが、まるで鬼が暴れた後のような…。

カーテンが閉められており、薄暗くなつている部屋の隅で、綾子は膝を抱えてうずくまつていた。

「綾子！…」

「日比野さん！…」

私は夏子よりも先に、綾子に近付いた。

綾子は、服がボロボロになつており、腕には、無数の引っ搔き傷のよつなものがついていた。

「綾子、どうしたの！？誰にやられたの！？」

綾子は震えながら私たちを見た。……田口まつりあらと涙が貯まつてゐる。

綾子は、涙声で私たちに向ひて言つた。

「未来…夏子…私…」

次に聞こえた言葉は、信じられない言葉だった。

「私……鬼になっちゃった……。」

言ふ終ふると、綾子は泣き出しちゃつた。
鬼…………って？

事情

言葉の意味が、よくわからなかつた。

田比野さんは私たちを見て一言、「鬼になつた」と言つたのだ。
鬼と聞いて、思い出すのは、アルトのような吸血鬼の存在。
でも、人間が吸血鬼になるなんて話、アルトからは聞いたことが無い。
い。……どうことだらう?

今、私の目の前では、安藤さんが必死に、泣きじゃくる田比野さん
を宥めている。

私は、改めて部屋を見渡した。

物が散乱した部屋、原型を留めなくなつた物たち……あの中に、
昨日私たちが上げたプレゼントが混じつてるとか、考えたくもない
が、今はそんなことも言つてられないのだろう。

今考えるべきは……田比野さんの状態だ。

「田比野さん、鬼つて、どういふことですか?」

田比野さんは、安藤さんに縋り付きながら泣きじやくつている。

……そんなときに聞く私もどうかと思うが。

「夏子、ちょっと待つてあげて。綾子がまだ泣き止んでないから……。

」
案の定、安藤さんに小声でそんなことを言われてしまった。
「す、すみません……。」

5分後、田比野さんはよつやく泣き止んだ。

「綾子、大丈夫?」

「……大丈夫……。」

日比野さんは、嗚咽混じりではあるものの、受け答えはできぬよつ
だつた。

「それで、その……綾子、鬼って、どういふこと？……吸血鬼、つて
こと？」

私が聞い「う」と思つていた質問を、安藤さんが聞いた。

「違う……鬼って言つのは、吸血鬼の事じゃなくて……その……食
人鬼の事なの……。」

信じられない言葉が耳に入つて來た。
食人鬼。人を、喰う鬼。

「食人鬼って……！？どういふこと！？」

驚いた安藤さんが再度質問をする。

「う……私、生まれたばかりの頃、悪魔に、襲われたことがあつて
……その時に、鬼の魂を、身体に、植えつけられたの……。」

日比野さんは、嗚咽混じりの中、淡々と答えを返してくれた。

「悪魔に……襲われた？」

「うん……生まれた日の夜、寝て、いるときに、悪魔が来て……それ
で……17歳になつたら、鬼が、身体を乗つ取るつて……。」

何を言つて、いるのか、私には理解できなかつた。

……悪魔の存在は、安藤さんから聞いたことがあるので、信じてい
ないわけではない。だが、その悪魔が、なぜ日比野さんに……？

「……未来、私、どうしよう…。」

日比野さんは目から大粒の涙を流しながら安藤さんにすがつた。

「落ち着いて、綾子。……じゃあ、この部屋の状態は、綾子の中にいる鬼がやつたってこと?」

安藤さんは理解が早いらしく、自分なりの解釈で話を進めた。

「うん……昨日の夜、鬼が、私の中で暴れだして……抑えることができなくて……それで…ぐすつ…。」

日比野さんはまた泣き出してしまった。

「ちょ、ちょっと待つて下れい、安藤さん。私にもわかるように説明してくださいよ。」

安藤さんは日比野さんを宥めながら、私に説明してくれた。

「えつと……綾子は、生まれた日の夜に、悪魔に襲われて、身体に食人鬼の魂を植えつけられたの。それで、その鬼が昨日の夜、綾子の中で暴れだして、こんな状態になっちゃったの。…そうだよね? 綾子。」

安藤さんに宥められながら小さく頷いた。

「で、でも、なんで日比野さんは、悪魔に襲われたんですか?」

「それはさすがに解らない……綾子、何かわかる?」

首を横に振った。

「解らないつ……でも、次、鬼が暴れだしたら、もしかしたら、未 来たちを、襲うかもしれないつ……。」

日比野さんは、安藤さんから離れた。

「だからさ……未来、夏子、今日はもつ帰つて……私、未来たちを襲いたくないからさ……。」

そして、引きつったような作り笑顔でそう言った。

「……そんなこと、安藤さんが許すわけなかつた。」

「……なにそれ。」

安藤さんの声のトーンが下がった。

安藤さんは日比野さんの両肩を掴み、自分の方に向けさせた。

「ふざけないでよ！…襲つかもしれないから帰れって！？聞いたことないよそんなの…！大体、ここまで話しておいて、これ以上深入りするなってどうこうことよ……！」

安藤さんは叫んだ。日比野さんは目を丸くしていた。

「未来つ……でも、私、鬼になっちゃったんだよ？…人間じやないんだよ…？」

「私だって、完璧な人間じやないよ……」この世に、完璧な人間なんていないんだよつ…。

安藤さんの目には、うつすらと涙が貯まっていた。

「未来…でも…」

その時、

「う…」

日比野さんが突如、胸を抑えて俯いた。

「あ、綾子、どうしたの！？綾子！？」

「……来る…鬼が、来る…私から、離れて……早くつ…。」

震えた声で答えた。

そして

「うわあああああああつーーーーー！」

日比野さんは突如叫びだし、田の前にいる安藤さんに掴みかかった。

食人鬼

綾子は、叫びながら私に掴みかかって來た。

「つー？」

咄嗟の対応ができず、後ろに倒れ、押し倒される形になる。

「日比野さん！？」

夏子は田の前の状況が把握できないらしく、茫然としていた。

「あ……綾子……つ。」

綾子は私の首を絞めながら何かを呟いていた。

”人間の肉が……欲しい……” そう呟いているように見えた。

確信した。今、私を襲っているのは、綾子ではなく、鬼 食人鬼

なのだろう。

……ならば、手加減する必要はない。

私は鬼の両手を掴み、渾身の力で引きはがした。……もともと力のない綾子の腕だ、鬼とはいえ、私を取り押さえるなんて、100年早い。こいつ見えても力には自信がある。

「つりやあああつーー！」

自分の両足で鬼の両足を持ち上げ、見事な巴投げを決めてやった。

鬼は、沈黙した。

巴投げを決めた際に、散乱している物で腰を強打したらしく、悶絶したまま動かなくなってしまった。

……つか、私、中学時代は空手習つてたから、体力には自信あるけど、こうも見事に巴投げか決まるなんて思ってなかつた。…巴投げつて、柔道の技だよね？

「あ、安藤さん、大丈夫ですか……？」

「うん、大丈夫。それよりも……。」

私は目の前に転がっている鬼に近付いた。

顔が、いつもの綾子よりも青白かった。そして、決定的な物が一つ。

「夏子、これって……。」

夏子を呼んで確かめさせる。

「安藤さん、これって……”角”……ですよね？」

“角”……だよね？

まるで本物の鬼のような、長さ5センチほどの小さな丸い角が2本、綾子の頭から生えていた。

一見、シリエットにしてみると、猫耳にも見えるほどの可愛らしい小さい角……綾子は本当に、鬼になってしまった……。

「綾子……。」

すると

「んう……。」

綾子 ではなく、鬼が、目を覚ました。

「痛い……まつたく、なんて人間だ……いきなり攻撃をするなんて……。」

「 鬼は、腰を抑えながら起き上った。その声は、綾子の声ではあるものの、トーンが違つた。

「 ……日比野さん？」

夏子は、恐る恐る鬼に話しかけた。

「うん？」

鬼は「こちらを振り向いた。…目が、赤かつた。

「 ……なんだ？お前達、人間の癖に…私が怖くないのか？」

鬼は睨みながらそう言つた。……かなり、古風な言い方だった。

「 ……いや、腰を抑えながら言われても、怖いとも思わないし……。」

「 ……まあいい。私は今、腹が減っている。そこの娘、私に喰われる。」

「

そう言いながら、鬼は私を指さした。

「え？… わ、私？」

「そうだ。お前しかいだらう、隣の娘でも構わないが……お前の方が胸もあるし、身長もある。……きっと食べがいがあるだらう。胸の事は出来れば触れてほしくなかつた。……グレイもそつだが、夏子も結構胸の事を気にするタイプなのだ。

「……胸の事は、触れないで下さい……。」

夏子は寂しそうに呟いた。

「胸を気にして何が悪い、貧乳は食べがいが無いと言つただけだ。鬼はそう断言した。

「つ…… 酷い……。」

夏子は顔を抑えて泣き出してしまつた。

「夏子… 泣かないで、夏子。」

私は咄嗟に夏子を宥める。

夏子は泣きながら鬼に質問した。

「… あなたは何者なんですか？… ビュして、田比野さんの身体にいるんですか？」

「……人間に答える義務などない。ビュせ私に喰われる運命なのだからな。」

「じゃあ、喰われる前に教えてくれても、いいでしょう？… 真土の土産つてことで……。」

夏子もなかなか的確な事を言つなかつた。少し感心した。

「む…… それもそうだな……。」

鬼は静かに語りだした。

「今から約17年前、1人の人間の娘が誕生した。

同じころ、別の場所で、私は、1匹の悪魔に身体を消され、魂だけの存在になつた。

その日の夜、その悪魔が娘のところに行き、私の魂を、その娘の身

体に植えつけた。

「私は、彷徨つた。外に出たくて、自分の身体が欲しくて、娘の身体を延々と彷徨つた。……10年ほど経つたか、ようやくたどり着いたのが、娘の、”記憶”だつた。

私は咄嗟に、娘に夢を見せた。……自分の身体に、私という食人鬼の魂が植えつけられるまでの、記憶を見せたのだ。そして、最後に付け加えた。”7年後、私は覚醒する。お前の身体を利用して、食人鬼として覚醒する。”と。そして、7年後である昨日の夜、私は覚醒したのだ。……食人鬼としてな。……納得したか？」

私と夏子は、黙つて鬼の話を聞いていた。

「……聞けば聞くほど、信じられなかつた。だつて、綾子はそんなこと、一言も言つてなかつたのだから。

「……どうして、7年後に覚醒するつて言つたの？」

「それほどの歳月が無ければ力が貯まらなかつたからだ。……さあ、もういいだろ、大人しく喰われる。」

「嫌だ。」

「何？」

「喰われろつて言われて、そう簡単に喰われるわけないでしょ。」

鬼の目の色が変わつた。

「貴様、約束を破るつもりか？」

「約束も何も、”喰られてやる”なんて一言も言つてないでしょ？さつきから鬼とずっと対峙している私を見て、夏子は不安でいっぶいだつたようだ……

「あ、安藤さん、大丈夫なんですか？そんな、挑発するようなこと言つて……。」

夏子が恐る恐る話しかける。

「そうだぞ？あまり私を怒らせない方が身のためだぞ。」

この鬼、便乗しだした……。

「……じゃあ聞くけど、なんであんたは私を襲わないの？お腹すいでるんでしょ？」

「…それは、私の中にいる主^{あいじ}が、お前を襲わないでくれと言つているからだ。」

「主つて……綾子の事？」

「ああ。先ほど、完全に意識を乗つ取つたつもりだったのだが、なぜか意識が残つていたらしい。」

「じゃあ今、私たちの会話を、綾子は聞いていたわけか…。」

「じゃあ、綾子を出してよ。ていうか、綾子の身体から出て行ってよ。」

そう言つた途端、鬼の表情が暗くなつた。

「……私も、できることならそうしたい。でも、それができないんだ。この身体に魂を植えつけられてから、必死にもがいて出口を探した…でも、見つからなかつた…。」

鬼は、俯いてしまつた。

「…憎い、私をこの身体に閉じ込めた、あの悪魔が憎い……もう、私はこの身体から出る」とはできないのだ…。」

声が涙声になつてゐる。…こつそり顔を覗くと、涙を流していた。

「主には、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだつ……。」

「……本当に、申し訳ないと思つてる?」

「なんだと…？」

「本当に申し訳ないと思つてるなら、どうして覚醒なんかしたの？
申し訳ないと思うなら、覚醒なんてしなくても」

「解つたような口を聞くなつ…！」

水を打つたように、辺りが静かになつた。

「貴様に…貴様に、何が解る！…私は、覚醒したくて覚醒したわけではない……あのままでは、私の魂はいづれこの身体の中へ消滅し

てしまつ、それは嫌だつた、だから覚醒せざるを得なかつたのだ！

！」

言い終えると、鬼はいきなり私に掴みかかつた。

「つー？」

思わず怯んでしまつた。

鬼は、先ほどのような失態をしないように、がつちりと両手で、全体重を掛けて私の腕を抑えた。

「あ、安藤さんつ！」

夏子は怯えて鬼に近付けない様子だつた。

「……もう、限界だ。お前を喰う。」

鬼の、燃えるような赤い目が、私を捕えた。

その時

「うつ…………。」

鬼が、私の手を離し、代わりに自分の頭を抑えて悶え始めた。

な……何が起きてるんだ？

「つ……主、申し訳ない……喰わないから、許してほしい……。」

綾子だ。鬼の中にいる綾子が、必死に鬼を止めてくれているんだ。

「うつ…………うわああああつ…………」

鬼は叫び、その場に倒れてしまった。

「ひ、日比野さん！？」

夏子が声を上げる。私はゆっくりと身を起こし、鬼に近付いた。角が消えている、顔色もいつもの綾子に戻つてゐる、つてことは……。

「う…………み、未来？」

「綾子、大丈夫！？」

「日比野さん、大丈夫ですか！？」

「平気……それよりも、ごめんね……鬼が出てきちゃって……。」

綾子はいつも以上に疲れた顔をしていた。

「これからのこと

今、私たちはリビングにいる。

綾子の中にいる鬼は、あれ以来、音沙汰無し。

綾子が、ボロボロになつた服を着替えてる間、ほんの少し、散らかつたものを片付けて、私たちはソファに座つた。

「……未来、夏子…私、これからどうしたらいいのかな…。」

綾子の表情は、ずっと暗いままだつた。

「今は、まだ鬼が大人しいからまだいいけど、次出来たら、もしかしたら、私の両親も食べてしまふかもしだれないし…どうしたらいいんだろう…？」

「……。」

何も、言えない。

そもそも、なんで私に、鬼の魂を宿していることを黙つていたのだろう？私は、ちゃんと綾子に、自分の性別の事を明かしたのに……どうして？

「……日比野さん、一つ、答えてくれませんか？どうして、安藤さんに、鬼の事を黙つていたんですか？」

夏子が、私の今一番気になつていてることを聞いた。

「安藤さんも、私も、日比野さんに自分の身体の事を、ちゃんと話したんですよ？なのにどうして、自分の身体の事は話してくれなかつたんですか？」

「それは、その……遠ざけられると思ったから…。」

「遠ざけられる…って？」

「だって、私、人を喰うんだよ？……性別が変わるとか、魂が身体から抜けるとか、そんなんじゃないんだよ？」

「でも、それは日比野さんの意志ではない…そうですね？」

「ただけど……。」

「だつたら話は別です。日比野さんの意志で人を喰うのであれば、私たちはあなたを遠ざけたかもしません。でも、実際は日比野さんの意志ではなかつた。…遠ざける必要がありません。」

夏子はあるで、こいつかの私のよつな、そんな口調だつた。

「夏子……。」

「私も、夏子の意見に同意だよ。綾子を遠ざけるなんて、考えたくない。」

「未来……ありがとう。」

綾子は、少し寂しそうに笑つた。

「それで、これから的事なんですが……。」

夏子は少し気まずそうに切り出した。

「…これから的事なり、一つ提案がある。」

「提案…ですか？」

「うん。とりあえず綾子には、一度、マンションの方の私の家に来てもらひ。」

その言葉に、綾子が反応した。

「未來の家に？佐川先輩の家じゃなくて？」

「あー…実はね、紅丞先輩の家、今、両親帰つてきてるんだよね…。」

まあその辺の話はその通り。だから今、マンションの方の家には暁文がいる。

「だから未來の家か…どうして？」

「会わせたいヤツがいるんだ。」

「もしかして…暁文君？」

「うん。何かわかるかもしれないし。…わからなくても、こじてるよりはマシだと思つ。」

物が散乱し、散らかりきつたリビング……見てるだけで、気分が重くなる。

「…………わかつた。でも、部屋、どうしよう…昨日は、親が仕事で帰つてこなかつたから、部屋を荒らしているところは見られなかつたけど、この状況……。」

「自分の子供が誕生日なのに、仕事優先なんて、どんな親なんだろう…と思つたが、ここで、夏子が口を挟んだ。

「安藤さんの家に出かけて行つて、その間に空き巣に入られた、って言えば、大丈夫じゃないでしょうか?」

「…………多少無理があるが、黙つて出ていくよりはマシだなつ。

「それじゃ、綾子。」

「うん。」

「安藤さん、私もついて行つていいいですか?」

「大丈夫だよ、行こう。」

私たちは、綾子の家を出た。

肉食

「……というわけなんだけど、何かわかるかな？」

夏子と綾子を寝室に通し、私はリビングで暁文に事情を説明してた。
「食人鬼…か。未来はそいつと話をしたのか？」

「うん。」

「怖くなかったのか？」

「怖く、なかつた…つて？」

「食人鬼は、本来は吸血鬼をも凌駕するほどの強さを持つ。だから、
吸血鬼は皆、食人鬼を恐れて、普段なら近付くことはおろか、話す
事すらしない。」

「それが、どうしたの？」

「未來の身体には、ほんの少しだが、俺やグレイの血が流れている。

「怖くなかったのか？」

「いや、全然……そんなこと、考えもしなかつたから、解らない。」

「そうか……それにしても、食人鬼か…久しぶりに聞いた名だな…。」

「”久しぶり”って、どういうこと？」

「食人鬼は、今となつてはもう絶滅危惧種みたいなもんだ。…それ

がまさか、綾子の身体にいるなんてな。」

「絶滅危惧種……数が少ないってこと？」

「ああ。解つてるだけでも、100人いるかいないか…だな。」

「そんなに少なくなつてているのか…意外だ。」

「それで、何か、解るかな？」

「何かつて？」

「その…食人鬼を抑える方法…つていうのかな。」

「…さつきも言つたが、食人鬼は絶滅危惧種だ。しかも、実態がま
だ明らかになつていない。抑える方法なんて、俺には解らない。」

「そつか…ごめんね、連れてきちゃつて…吸血鬼が、食人鬼を恐

れてるなんて、考えてなかつた……。」「別に、平氣だ。それよりも、氣をつけろよ。

「それ、どういうこと?」

「食人鬼は、文字通り人を喰うんだ。……氣をつけろよ。」「うん、解つた。ありがとう。」

私は寝室に移動した。

綾子と夏子は、ベッドに座っていた。

「おまたせ。……綾子、大丈夫?」

綾子は、両腕を抑えながら、何かを堪えるよつな顔で、俯いていた。
「安藤さん、日比野さんが……。」

「綾子、どうかした?」

私は綾子に近付いた。

「……未来……また、鬼が出てきそり……。」

「綾子、耐えられる?」

「無理……かも……。」

綾子の身体は限界を超えていたようだった。

「つう……。」

綾子の身体が震えだす。

「うわああああああああ……!」

綾子は叫びながら床に倒れた。

「日比野さん！？」

夏子が慌てて駆け寄る。

「夏子、離れて！！」

私は咄嗟に支持を出す 夏子が、綾子から離れる。

「つ……ふう…。」

鬼が目覚めたようだ。

「主……なぜ素直に私に替わってくれないのだ…。」

鬼はそう咳きながら起き上った。

「……いや、そりやあ食人鬼に素直に替わる人間なんていないでしょ。」

「お前、さつきから馴れ馴れしくないか？私は食人鬼なんだぞ？…普通なら私を怖がるはずだろう。」

「もう慣れた。…あんたは私を喰わないって、断言できる。」

「ふん……確かに、私はお前を喰わない。だが、襲うときがある。」

「…そこにはいる娘も同じだ。」

鬼は夏子を見ながらそう言った。

「え…あ、はい…。」

夏子は戸惑いつつも答えた。

「…それにしても、本当に鬼みたいな角があるんだね…暁文たちとは違うのか…。」

「鬼のような角があるのは、食人鬼だけだ。…触つてみるか？」

「いいの？」

「ああ。」

そう言いながら、鬼は頭をこちらに向かた。私はゆっくりと手を伸ばし、角に触つた。

「あれ？…意外に柔らかい。」

例えるなら、高反発の枕のような…それ位の硬さだ。

「最近では、角を骨の一部と勘違いする輩^{ひや}がいるが、それは違う。これは正真正銘、食人鬼の角だ。骨ではない。」

「へえ…… そうなんだ。」

私はゆっくりと角から手を離した。

「あ、あの、安藤さん、大丈夫なんですか？ 食人鬼に触つたりして……。」

夏子は、私たちから少し距離を置いている。

「大丈夫だよ。襲うけど、喰わないって約束してくれたし。」

「そ、そうですけど……。」

不安を抱える夏子に構わず、私は鬼に質問した。

「……ねえ、あなた、名前は何ていうの？」

「名前？」

「うん。いつまでも、”あんた”や”あなた”じゃ駄目な気がするからさ。」

「……名前は、忘れた。」

「忘れたの？」

「ああ。悪魔に身体を消される際に、記憶も多少消されてしまったらしくてな……自分の名前が思い出せないんだ。だから、私の名前はお前がつけてくれないか？」

「え、私が？」

「駄目か？」

「いや、駄目じゃないけど……こいの？ 私で。」

「どういう意味だ？」

「だって、私、ネーミングセンスがあれだし……。」

以前、綾子に、”未来のネーミングは少し雑すぎる”と言われたことがあった。……先ほど、鬼は、綾子の記憶に行つたと語っていたので、もしかしたら知つているかもしれない。

「ああ…… そういえば、お前のネーミングは少し雑すぎるけど、主の記憶にあつたな……。」

知つてやがった……しかも、セリフをそのまま引用しやがった……。

「……まあ、それでもいいなら、名付けてやるけど？」

「頼みたいが……なぜ怒ってる？」

「……怒つてない。」

私は考えを巡らせた。

食人鬼……古風な喋り方……それじゃあ

「……椿。」

「椿？」

「そう。椿つて、名前、どうかな？」

「……まあいいか。それで構わない。」

若干不満の表情を覗かせたように見えたのは氣のせいだらうか。

「いやなら、変えるけど？」

「もう椿でいい。今更変えられると面倒だ。」

何が面倒なんだろう……まあいいや。

「で、椿、ちょっと質問なんだけど……。」

「なんだ？」

「綾子に替わるの、抑えることってできないの？」

「可能だが……人の肉を喰えないとなれば、私は意地でも表に出でくるぞ。」

「てことは今、お腹が空いてるから、ひっすり出てきてるってこと？」

「そうだ。……なのに、主はお前たちを喰うなと言つ……私にとつては非常に辛いことだ。……解るか？ 美味しそうな飯を目の前にだされ、それを喰うなと言われると、ちょっと辛い。」

「……。」

解る、とは、言いたくなかった。

私は食人鬼ではないので、そこまで詳しくは解らないが、想像することはできる。確かに、美味しそうな飯を目の前に出された挙句、喰うなと言われると、ちょっと辛い。

「……でも、人を喰うのは駄目だよ。だって、喰つたらその人を殺すことになるし……犯罪だから。」

「いや、別に、腕の1本や2本喰つたところで、死ぬ人間はいない

だろう?」

「出血多量で死んじゃつって……」

「何を言っている、腕が無くとも生きている人間だって世の中にはいるのだぞ?」

「そうだけど……でも、人を喰うのは駄目だよ。何か他のもので代用できないの?」

「代用か……だが、生肉なら、基本は何でもいい。」

「そうなの?」

「本来は人間の肉なのだが……牛の肉でも代用は可能だ。」

「そつか……じゃあ、ちょっと待つて。」

私はすぐさま寝室を出て、冷蔵庫に行き、適当に中を探り、それなりの大きさのステーキ用の生肉を持って行つた。

「これで、どうかな?」

「ん……本当に持つてくれるとは思わなかつたな……。」

椿は肉を受けとりながら呆れたように呟いた。

「だつて、椿が空腹な状態だと、綾子に替わってくれないんじょ?」

「まあ、そうなるが……。」

椿はトレイのラップを丁寧に外した。

「あ、そうだ……お前達、後ろを向いてくれないか?」

「どうして?」

「その……私の食べ方は、少々エグイから、後ろを向いてほしいのだが……。」

「……わかつた。夏子。」

私は夏子に呼びかける。

「あつ、はい。」

夏子と私は、椿に背を向けた。

……なんか後ろから、言葉では表せないような、グロテスクでエグい音が聞こえるんだけど……これ、絶対振り向いたら駄目だよね？

「……ふう、終わったぞ。」

私と夏子は同時に振り向いた。

椿は口の周りを素手で拭いながら、空からのトレイを私に差し出した。

私はそれを受け取る。

「……満足した？」

「一応な……でも、やはり人間の肉がいいな……。」

椿が物足りなさそうな目で私を見つめる。

「だから、駄目だつて。さあ、もういいでしょ？ 紗子に替わってよ。」

「ああ。」

椿はふうっと、息を吐いた。

すると、椿の角がだんだん短くなつて行き、最終的には見えなくなつてしまつた、そして

バタツ、と、椿は倒れてしまつた。

「だ、大丈夫！？」

私は慌てて椿に駆け寄つた。

「う……大丈夫……。」

椿 ではなく、綾子が目を覚ました。

「綾子、大丈夫？」

「……平気、ありがとう。」

「もしかして、椿とのやり取り、見てたの？」

「うん……見えてた。……凄いよ、未来、食人鬼と仲良くなつちゃうなんて……。」

仲良くつて言うのか？あれ……。

「い、いやあ……まあね。」

正直な話、今まで散々、吸血鬼やら天使やら悪魔やらと付き合つてきたので、今更食人鬼が怖いとか思わなくなつてしまつた。

「……とにかくで、綾子。椿の、食事の事なんだけど……。」

「うん、生肉を食べれば大丈夫なんだよね？」

「多分ね。……その状態で、椿に話しかけることってできるね？」

「話しかけるつて……どうやって？」

「なんていうかその……念じるつて言いつのかな……できる?」

「ちょっと待つて……。」

綾子は念じるように皿を開いた。

数秒後

「……ちょっとだけ会話ができるみたい。まだよくわからなんですけど……。」

「なんか、言つてた？」

「うーん……”腹が減った”って言つてた……。」

「肉一枚じゃ満足できないのかあいつ。」

「なんか、相当空腹みたい……どうしようつ?未来……。」

「どうしようつたつて……本人からはほかに何か要望はあるの?」

「……わかんない。何も聞こえない……。」

「そつか……でも、とりあえずそのままで帰るのはちょっと危ないかも。今日は泊まつてつよ。」

「え、大丈夫なの?……未来が寝てる間に、椿が襲つちゃうかもしないよ?」

「襲われても、喰われないから大丈夫。」

すると、夏子が横から口を挟んだ。

「でも、安藤さん。……今日は泊めておくとして、明日からはじめるつもりですか?」

「それなー……ちょっと知り合いに相談してみる。」

「知り合いつて、誰ですか?」

「私の友人だよ。多分、食人鬼の事には詳しいと思う。……あくまで

予想だけど。」

「わかりました。……すみません、田比野さん。私ももう門限近いんで帰ります。ご協力できなくて申し訳ありません…。」

「あ、大丈夫大丈夫。ありがとね、夏子。」

「はい。それでは、失礼します。」

夏子はそのまま寝室を出て行つた。私も送るために、綾子をおいて玄関に行く。

「……あの、安藤さん。」

「何?」

「気を付けてくださいね?相手は食人鬼なんですから…。」

「大丈夫、ありがとう。」

夏子はまだ、中学校からのイジメがトラウマで、人間不信から脱出できていない。……逃げたくなる気持ちもわかる。

「それでは、失礼します。」

夏子は一礼し、部屋を出て行つた。

寝室に戻ると、綾子が少々困ったような顔でベッドに座つていた。

「綾子、どうかした?」

「うん……それがさ、私、急遽ここに来ることになつちやつたから、着替えとか何にも持つてきてないんだよね…。」

「あー、それは大丈夫。私の使つていいから。」

「本当に?ありがとう。……じゃあ、先にお風呂入つちやつてもいいかな?なんか疲れちゃつて…。」

「良いよ、着替えは箪笥の中から適当に持つてつていいから。……脱衣所の場所、わかるよね?」

「うん、ありがとう。」

綾子は寝室を出て行つた。

肉食（後書き）

齧る時に口づぶのを設定にしようと悩んでいます

6月15日の夜、時間にして11時。

私は1人、来るであろうその瞬間に怯えていた。

親も仕事で、家で1人。自分の部屋のカーテンを閉め切り、部屋の

10歳の誕生日の夜に見た夢：“7年後に食人鬼が覚醒する”

……それからはずつと、自分の誕生日を迎えるたびに、いつか来る
であろうその瞬間が怖くて怖くてたまらなかつた。

そして、11時35分42秒。その瞬間は訪れた。

身体中の血が徐々に熱くなり、脇が締め付けるよ。頭痛は蔓われる。

「はあ。」
「はあ。」

息が上かり、震えが酷くなる。

怖い。自分が自分じゃなくなる。そんな気分。

第三回 金田一の死

そして

「うわあああああああああああああつつ！――」

頭痛が酷くなり、息が詰まる。……まるで、何かが身体の中を駆けまわっているような、そんな苦しみが襲つてくる。

「ああああつ……うわあああああつ……！」

もはや、自分がどんな状況に置かれているのか、理解する方が難しかつた。

私は夜通し、暴れまくった。……家がめちゃめちゃになるまで、暴れまくった。それでもしないと、自分の中で覚醒を図りうとする食人鬼を抑えることができなかつたから。

「……はあ……」

風呂上がり、着替えた後、脱衣所で昨日の事を思い出して思わずため息をこぼす。

今でこそ、食人鬼　椿は、大人しくしてくれてはいるものの、次いつ暴れだすか解らない。早いうちに、未来たちから身を引いた方がいいのかもしれません。

でも、未来や夏子は、私を受け入れてくれた。“遠ざけない”と、断言してくれた。…身を引くなんてしたら、逆に怒られるかもしだれ

ない。

……だったら、私自信の力で、どうにかして椿を抑えないといけない。しっかりしろ、自分。

(主...)

「.....え?」

今、誰かの声が聞こえたような...。

もしかして.....椿?

(はい。やつと聞こえましたか...)

なんだろう?...身体の内側から声が響いてくる.....未来の言つてた、椿と会話するつて、こういうことなのかな?

だとすれば、いろいろと話を付けておく必要がある。

あなたは.....食人鬼なの?

(今更何を.....あなたも解つてているのでしょうか?)
わ、解つてる、確認よ、確認。.....それにしても、食人鬼にも感情
があるんだね。

(当たり前でしょう、吸血鬼にも感情があるのですから。)

ふーん……ねえ、一つ、頼んでも良いかな？

(はい。)

出来れば……いや、絶対、約束してほしいことがあるの。

(……何でしよう？)

今すぐここで、”何があつても、人間は食べない。”って約束して。
（……やはり、その事でしたか……主、私はこれ魂のみでも、れつきとした
食人鬼なのですよ？そんな私に、”人を食うな”とは…無理難題を
押し付けないでもらいたいものです。）

で、でも、人を食べるなんて、非常識だし

（ならば、主。もしもあなたが”非常識だから、牛や豚などの肉の
類は食べるな”と言われたら、どうなさるおつもりですか？）
そ、そりゃあ、別の食べ物を食べるしか……。

（確かに、人間ならそうなさるでしょうね。）

……ですが、私は食人鬼。主に人しか食べることが出来ません。先
ほど、牛の肉を食べはしたものの、あれは人間で言つ”安上がりな
スナック菓子”程度にしかなりません。食べ続けても栄養は溜まら
ず、寧ろ身体に毒です。だから私は人を食べなければならない。

……納得していただけましたか？）

……。

椿の言つていることは、見方を変えれば正論と言える。が、それは
あくまで”見方を変えれば”の話だ。

直球で捕られれば、椿のやつてることは、”巧みに話術を駆使し、
自分の欲望のために無理に話を押し通そうとしている”ようにしか
思えない。

そんな奴のために立ち上がり、自らを犠牲にしてまで助けようとする奴なんているわけ無い。

人間は、そこまで精密に出来ていないのだ。

むしろ、そこら辺で飼われてる犬や猫の方が、より精密に出来ているに決まっている。

もちろん、私も人間であるから、約10行前の言葉に反しているわけじゃない。
だから

……『めん、椿。私、その事には納得できない。
(主...)』

そちらの事情はどうであれ、あなたの身体は今、私なわけだからさ
……私、生肉はギリいけても、さすがに人は無理だよ。

(……解りました。)

その言葉を最後に、椿の声は聞こえなくなってしまった。

それと同じタイミングで、脱衣所の扉が開き、未来が入ってきた。

未来の性別は、女から男に変わっていた。 どうやら、私が入浴中に暁文君に血をあげたらしい。 …… 見たかった。

「お、もう着替えてたか。遅かつたから心配したよ。」

「あっ、『ごめん』『ごめん』。髪、自然乾燥してたー。」

わざとらしく頭の上にバスタオルを乗せてアピールする。

「タオル乗つけてたら乾かないだろ? …… にしても、パジャマがピツタリでよかつたな。」

未来が私を見ながらそう呟いた。

「うん。未来と身長同じでよかつたよ。」

何とか話を合わせ、私と未来は寝室を出た。

「綾子、今日は一緒に寝るか?」

そんな一言から、始まった。

「……は?」

「いや、だから…リビングには暁文がいるし、両親の部屋は使えないから、一緒に寝るか?って……。」

いやいやいや。

何言つてんのこの人。

「……はあ。未来、私、鬼になっちゃったんだよ?人を食べるんだよ?そんな私と普通寝る?」

「え、嫌なのか?」

「嫌つて言うか」

嫌つて言つた、むしろかつてよくて少し童顔っぽい男バージョンの未来と一緒に寝られるなんならこんな嬉しいことは……何言つてんだ私。

「……私は構わないんだけど、逆に未来が危険に晒されるかもしれないよ?」

「ああ……安心しろ。こっちには秘策がある。」

「秘策?」

「そう。……だから、心配すんな。」

未来はそう言いながら、私の肩にポンと手を乗せた。

身体が、椿が、未来に反応している。心臓が熱い。

「…………わ、解った。じゃあ、ベッドの隣に別の布団持つてこないと……。」

未来の手を軽く払いのけながら、私は呟いた。

「え？…………いや、一つのベッドで一緒に寝るんだナゾ…………。」

「…………え？」

「え？」

「いや、”え？”じゃなくて。…………え？」

なんかこれじやあ私が必死に”え？”の言い方を教えてるみたいじゃないか。違う違う。

「えつと……いいの？私なんかと一緒に…………。」

「いや、だから言つただろ？俺には秘策があるつて。」

「うーん…………そつは言つけど……。」

どうするべきか。

「…………もう悩んでる暇なんて無いよ。ほひ。」

そう言いながら、未来は布団に潜り込んだ。

…………まあ、いやとこいつ時は、ベッドから転げ落ちたりして逃げねばいいか。

別に、男の未来とは、1年の時もお泊まり会（2人きりの）で一緒に寝たことあるから抵抗はない。…………シシコリは受け付けない。

「よこしょつ。」

私も布団に潜り込む。

未来のベッドは普通のベッドよりも大きいので、2人入ってもくつつく事はない。

「おやすみ、綾子。」

「うん。おやすみ、未来。」

朝。

私はいつも、目覚まし時計によつて目を覚ます。どこかに泊まつて
るときは誰かに起こしてもらつてる。

本日も、例によつて例のごとく、起こしてもらつて目が覚めた。
のだが、その起こした人物、及びその起こし方ときたら……。

まあ、簡単に言えば、”未来と一緒にいることに堪えられなくなつた椿が無理矢理、私と替わろうとして暴れてる”だけの話なのだが、
私にとつてそれは”危機”以外の何物でもなかつた。

「……はあ……はあつ……」

突如、息が苦しくなり、意識が覚醒する。
心臓が鼓動を速め、身体中の血が疼く。

「 紗子！？大丈夫か！？」

異変に気付いて起きた未来が私に近づく。

「のままじゃあ、まずい。

「……………ダメつ……椿、やめて……」

胸を抑えながら、かすれた声で呟くが、恐らく届いてはいないだろ
う。

「…………うわあああああああつっーーー！」

突如、身体の自由が無くなり、主導権を奪われたことに気付く。椿はそのまま未来をベッドの外に突き飛ばすように押し倒した。

「はあ……はあつ……食人鬼の隣で堂々と居眠りとは……無謀なことこの上ないな……。」

椿は未来の肩を抑えつけ、息を切らしながらそう言った。

「……息切れながら言われても、怖くも何ともないんだが……。」

未来は何故か食人鬼を挑発するようなことを言っている。

「ふん……貴様、調子に乗つていられるのも今のうちだぞ？」
「へえ……？俺としては、早く綾子に変わつてほしいんだがなあ？」

「貴様あつ……。」

椿が肩を掴む手の力を強めるが、未来は一切動じない。

「……それよりも、椿。いいのか？無理矢理替わつちまつて。主様に怒られるんじゃないの？」

「…………！」

未来の言葉に、椿が反応した。

「そ、それは……」

「解つたら早く退け。お前は綾子には逆らえないはずだ。」

「…………。」

椿はゆっくりと未来から離れた。

「……貴様、確かに昨日、”秘策がある”とか言つたな……まさか、これの事が？」

椿の言葉に、未来は起き上がり、小さく頷いた。

「椿は綾子の言葉には逆らえないはずだと思つて。」

「……逆らえなくとも、無理矢理表に出ることぐらいができる。」

「ふーん?……でもさ、勝手に替わられちゃあ迷惑だよなあ?綾子。」

「え? 今の、私に言つたの?」

「…………。」

椿は俯き、何も言わない。

「……はあ……とりあえずそこで待つてろ。なんか持つてくるから。」

そう言つと、未来は寝室を出て行ってしまった。

(……なんか、怒つてませんでした?)

そりやあ、未来は朝弱いからね……寝起きは結構不機嫌だつたりする時がたまにあるのよ。

(そうなんですか……。)

椿はベッドに腰掛け、膝の上で拳を作つて俯いている。

「未来が怖い?

(……少しだけですが。)

私も、たまに男の未来が怖いと思う時あるからね……。

(ああ、なるほど……そういうことがありますか。)

どうかしたの？

(“主が怖いと思ったものは、私も怖いと思つてしまつ”とだけ言つております。)

てことは、今、椿は未来が怖いのは、私の所為つてこと？
(聞こえは悪いですが、そういうことになります。)

……でかさ、椿。なんで私には敬語なの？

(そりやあ、この身体は”元々”主の物ですから、敬語になるのは当然でしょう。)

元々って……今も私の物だよ……！

(つ……怒鳴らないでください……頭に響きますから……。)

椿はわざとらしく頭を抑えている。

その時、ガチャッと扉が開き、未来が入つてきた。 性別が変わつてゐるところを見ると、暁文君に血をあげてきたらしく。

「なんだ、綾子に替わつてないんだ？」

未来は椿をじつと見つめている。

「……今、腹が減つてるからな……そういうわけには行かない。」「ふーん……じゃあ、これ。」

未来はそう言いながらステーキ肉が入つたトレイを差し出した。椿はそれを無言で受け取り、丁寧にビールを外していく。そうしてゐる間に、未来が椿に背を向けた。

(今のうちに襲つて食つてしまえば)

ダメっ！！！

(つ……わかりましたよ…。)

椿は右手で肉を持ち上げると、真上を向き、口をあーんと大きく開

け、肉を口に放り込み、咀嚼した。

はしたない……。

(食人鬼は眞二つですよ。)

「……終わつたぞ。」

肉の塊を嚥下した椿は、口を素手で拭いながら未来を呼んだ。

「……さあ、早く綾子に替わつて。」

未来は椿からトレイを受け取りながらしゃべり言つた。

「……。」

椿は無言で意識を集中させる

突如、意識が引っ張られ、身体の主導権が戻った。

「綾子、大丈夫？」

「大丈夫……平氣。」

「……よかつた。立てる？朝ご飯食べようと思つたんだけど……。」

「それが、さ……私、今のお腹いつぱいになっちゃつたみたいなの。」

「え、どうじつけと？」

「なんかさ……私の身体、中身の方は完全に食人鬼になっちゃつて
るみたいで……生肉とか受け入れちゃつてるみたいなの。」

「そうなの？」

未来の表情が暗くなつた。

「うん。……ほら、椿が出ても私が出ても、身体は一つしかないか
ら、そこら辺も同じになつてる……みたいな？」

おどけて笑つてみせるが、未来の表情は暗くなる一方だつた。

「……綾子。」

未来が真剣な表情で私を呼んだ。

「な、何？」

「とりあえず今日、グレイを呼んで、これからのことについて話したいと思つ。」

「グレイちゃんを?...何で?」

「それがさ……綾子、”悪魔”って信じる?」

ドクンッ

”悪魔”、その言葉を聞いた瞬間、心臓が大きく脈打つた。

(あ……悪魔つて……)

椿が反応してる。半ば、怯えているようにも思える。

「綾子?…どうかした?」

「い、ごめん、なんか、椿が怯えているみたいで……。」

「椿が?……ああ、そういうえば、悪魔に身体を消されたんだつけ……でも、椿には少し酷かもしけないけど、今日はその悪魔に会つてもらわなきゃいけないかもしれない。」

「えつ……どういうこと?」

「ちょっと話が長くなるんだけど

未来は簡潔に、わかりやすく、”悪魔とは何か”を私に説明してくれた。

「……といわけなんだけど……解つた?」

「えつと……つまり、今、グレイちゃんの羽には、その悪魔がいるつてこと?」

「やべ。で、その悪魔って言ひのが、普通の悪魔じゃなくて、なんとか……悪魔の王なのよ。」

「悪魔の王つて……まさか、魔王!?」

私の言葉に、未来は小さく頷いた。

その間、椿はビクビクしながらその話を聞いていた。
身体を消されたことがトラウマなのか、かなりテンションが下がっているようだった。

(あ……主。)

椿、どうかした?

(本当に、その魔王に会うのですか?)

成り行き上そうなるみたいだけど……怖いの?

(そりゃあ……それなりに。)

「……未来。」

「何?」

「なんか、椿が悪魔と会うのを怖がってるみたいなんだけど……。」

椿には気付かれぬように田で合図を送る。

「……へえー。食人鬼にも怖いと思つことがあるんだあー……。」

未来がジト目で私を見る。

(……主。)

何?

(会こまじゅう、その魔王とさり。アーリー。)

え、でも、怖くないの？

(私が魔王を怖がるわけ無いでしょ！っ。)

そう？ならいいけど……。

作戦成功。未来に目で訴える。

「それじゃ、しばらくおいで待つてね。
やつぱり」と、寝室を出て行ってしまった。

危機（後書き）

嚙下をずっとトカつて読んでました。……エンカですよね、なんか悔しい。

「グレイ、おまたせ。」

リビングでは、既に家に呼んでおいていたグレイがスタンバイしていた……といふか、ソファの上で瞳を綺麗なピンク色にして暁文にくつづいてイチャイチャしていた。

……なんか、見ててムカつく。

「はいはい……もうお終い。」

暁文からグレイを引き剥がす。

「嫌つ、もう少しだけえー。」

「散々時間あげたでしょ、ほらっ。」

「やあ～ん。」

なかなか離れない……。

「おい、未来。」

突如、暁文が声をかけてきた。

「な、何？」

「別に、くつづいてたっていいだろ。……もしかして、妬いてんのか？」

「まさかあつ……はあ…解つたよ、好きにしな。」

仕方なくグレイから手を離す。

グレイは再び暁文にくつつき、瞳をピンク色にしてイチャイチャし始めた。腹立つ。いつちだつて我慢してんのに。

「…………とにかく、綾子のことば、さつき話したよね？」

「うん……驚いたよ、まさか綾子ちゃんが食人鬼だなんて……。」

グレイは暁文の膝の上に座つて答えた。

「覚醒したのは昨日なんだけどね……それで、カラスに、そのことは？」

「一応、話は聞いてたみたい。」

「そつか。何か言つてなかつた？」

「特に何も……。」

「何も？本当に？」

グレイは小さく頷いた。

「そつか…おかしいなー、食人鬼がいると解ればすぐ出てくると思つたのに……。」

「もう少し待つてみてよ。もしかしたら夜になれば出てくるかもしれないし。」

「まあ、それもそつかな……じゃあ、出てきたら教えてね。」

とつあえず踵を返して寝室へと戻る。

「綾子？」

そーっと寝室の扉を開ける。

綾子はベッドには座つていなく、代わりにベッドの上に倒れるようにして眠つていた。

……そういえば、今朝は椿に叩き起されたる感じだつたからなあ、仕方ないか。

綾子に初めて会ったのは、クラスに馴染めるか不安だつた高校1年生の頃。

「安藤さんーー」んにちはーー」

いつもと変わらぬ優しい笑顔と元気な声で話しかけてくれた。私の性別を知つても、何も言わずに受け入れてくれた。

そんな綾子が 食人鬼。

信じられなかつた。いや、信じたくなかった。綾子だけは普通の人間だと思つていた。

「…………」

悲しくなつて、拳を握る。

気を抜けばいつだつて泣くことは出来る。でもそれは絶対しては行けないことのような気がする。

「ふー…………」

深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

その瞬間。

力チャツと寝室の扉が開いた。

驚いて振り返るとそこには

カラスがいた。

魔王

「……カラス。今日はまたずいぶん來るのが遅かつたね。」

「ん……天氣がよかつたからな。居眠りしてた。」

んなことしてゐる場合か。こつちは非常事態だつて言つのに。

「お前等の事情なんて知らねえよ。」

あ、心を読まれた。そういうば悪魔は心が読めるんだつた。

「つたく……あいつが話にててた食人鬼か？」

カラスがベッドに寝てゐる綾子を見た。

「今は違うけど……うん。」

「ふーん……で、あれを俺はどうすりやいいんだ？」

「えつと……何とかならないかな、その……食人鬼を引っ張り出すとか……。」

そつ言つた途端、カラスがため息をついた。

「はあ……お前さあ、俺を便利屋かなんかだと思つてねえ？こつちにだつて限度があるんだよ。」

「で、でも、カラスは魔王だし……。」

「魔王でも出来ない」とぐらゐある。神じやねえんだから。

「そつか……。」

「……ただ、その食人鬼は、”身体を他の悪魔に消された”つて言つたんだろう？」

「うん。」

「身体を消された……ねえ……ちょっと不透明だな。」

「どういうこと？」

「”身体を消されたつて断言できるのか”つて事だ。」

「？……消されてないつてこと？」

「そう。相手は悪魔。物質を一時的に消えたように見せかけるのは簡単なことだ。今頃どこかでまだその身体を消滅させずに保管して

いる可能性だつてある。」

「でも、もう17年も前だし……。」

「悪魔にとつちやあ17年も一瞬も変わらねえよ。にしても、もしも、俺の考えがあたつていれば……少し凄いことになるかもな。」

「す、凄いことって?」

「ん、何でもない。……なあ、未来。少し時間をくれないか?」

「え、時間?」

「そう。大体2日間。」

「2日間も? 何するの?」

「それは企業秘密。んじや。」

カラスは部屋を出でていつてしまつた。

「んつ……。」

綾子が田を覚ました。

「あつ 綾子、大丈夫?」

「うん……寝ちゃつてた……。」

田を擦りながらゆっくりと身を起こす。

とりあえず、上記でのカラスとの会話を綾子に伝えた。

「……じゃあ、2日後にならなきや解らないつてこと?」

「そう言つことになるね。」

「そなんだ……。」

綾子は納得しつつ、おもむろに携帯を開いた。

「……あ、親から電話來てた。」

「折り返していいよ、私リビングにいるから。」

「ありがとう。」

私は綾子に背を向け、リビングへと向かった。

綾子はもう限界かもしねない。

さつきはおどけて笑つたりしていたが、明らかに表情が疲れてきている。

……そりやあそうだ。食人鬼が覚醒して、何度も何度も入れ替わりを繰り返して、疲れない方がどうかしている。

綾子は、身体的にも精神的にも限界だろう。早めに何とか手を打たないと、命に関わるかもしねない。

……少し、自分にも制限をかけないとな。

リビングに行き、まだイチャイチャしている暁文とグレイを後日に、私はベランダへと向かった。

ベランダにて、ポケットから携帯を取り出す。

慣れた手つきで電話帳を開き、“佐川紅丞”を選択する。

そのまま、紅丞さんの電話番号に掛けた。

数秒後、紅丞さんが電話に出た。

「もしもし、未来？どうした？」

「紅丞さん、ここにちは。……その、実はちょっと大事な話があるんです。」

「大事な話…って？」

「実は、その……紅丞さん、私たち、いつ頃紅丞さんの家に帰られますかね？」

「ああ、安心した、今日の夜に家を出るつもりで、今、準備している
から。」

「やべ、ですか……。」

「どうかしたのか?」

「その……非常に言いづらいのですが……。」

「私、もしかしたら、あと2日間は、紅丞さんと会えなくなるかもし
れないんです。」

「えつ……? び、どういひことだよー?」

「お、落ち着いてください……。実は、綾子にちょっとトラブルが
ありますて、そっちの方に行かなくてはならなくなってしまって……。」

「田比野に、トラブル……なんか、珍しいな。」

「ですから、2日間は会えなくなるんですね……。」

「でも、そんな大それたトラブルなら、俺も何か手伝うナビ?」

言つと思つた。

「いえ、わざわざ紅丞さんの手を借りる必要はありません。それよ
りも、ちゃんと三食、野菜食べてくださいよ~グレイに監視させま
すからね?」

「えつ……解つたよ……。」

何とか話を逸らすことに成功した。

「……それでは、失礼します。」

ゆっくりと終話ボタンを押す。

……「れどりあえず、2日間の猶予は得られた。その間に何とか
問題を解決しないといけない。

寝室に戻ると、綾子が既に電話を終えて待っていた。

「未来……お母さんが、帰つてこいつて……。」

「そつか……それつて、今すぐ?」

綾子は小さく頷いた。

「今すぐは、キツいな……。」

空腹状態になつた椿がどうなるか……想像するだけでも恐ろしい。

「……解つた。じゃあ、送つていいくよ。」

「え、でも……。」

「いいから、いいから。じゃ、行こうか。」

私は携帯と財布を持つて、綾子は昨日着ていた服を着直し、家を出た。

「……ねえ、未来。」

「何?」

「本当に、いいの?」

「何が?」

「何がつて……。」

道中、綾子には元気がなかつた。

当然と言えば当然だが。

「……私、いつか本当に未来を食べちゃうかもしれないのに……。」

「だから……言ったでしょ？椿は、私を襲うことはあっても、食べるのではないって。わざわざもやつだつたし。」

「ううだけど……。」

綾子はなかなか私に目を向わせてくれない。私の斜め前をひたすら歩いている。

「……綾子、なんでいつも向いてくれないの？」

「……。」

ついには何も答えてくれなくなつた。

「ねえ、綾子！！」

後ろから肩を掴んだ。

「つーーー！」

瞬間、綾子は私の手を払いのけた。かなり強く。

「え……？」

思わず立ち止まる。

ようやくこちらを振り向いたかと思えば、俯き、そのまま何歩か後退りしてしまつた。

「……」「めぐ、未来……椿が、未来に反応してゐみたいなの……。」

息が詰まつてゐるのか、苦しそうに胸を抑えながら呟いた。

「だから……ごめんね、未来……あとは、一人で帰るから……。」

そういうと、綾子は茫然としている私に背を向けると、走つて行ってしまった。

悲

「ただいま。」

昼頃、ようやく未来が帰つて來た。

リビングで待つていると、未来が入つて來た。

「おかげり、未来。……腹減つたんだが。」

「うん、解つてる。」

俺は未来を取り押さえるように抱きしめ、首に歯を刺そつ

「ひ……。」

とした瞬間、すすり泣く声が聞こえた。

「…未来？」

未来は、泣いていた。俺に見られないように、顔を背けながら。

「ひ……ひわああああああつ…。」

俺はただ、頭を撫でながら、宥めることしかできなかつた。

寂しき

その日の夜、綾子からは何も連絡はなかつた。綾子の両親からも連絡がないといふを見ると、特に異変はなかつたよめに思える。

「はあ……。

ベッドに座り、膝を抱える。

俺が泣き止んだ後、暁文はさつさと吸血を済ませ、しばらくの間、俺を一人してくれた。……優しいんだか厳しいんだか解んねえよ、もひつ。

それにもしても、俺が暁文の前で泣くとは思わなかつたなー……俺も思い詰めてたのかな……。

こんな時、あいつがいたらどうするんだろう、と思つ。

あいつ……”瀬夏”だつたり、どうするんだろうへ。グレイの恋の時には1番役に立つた瀬夏……いつ帰つてくるんだろうなー。

……ヤバい、本気で寂しくなつてきた。

「…………瀬夏ー……。」

膝に顔をうずめて名前を呼ぶ。……すじゅあそのうひひょひじつ
出て来そつな気がする。

とりあえず、膝から顔を離し、大の字に寝転がる。

「…………あああああああー畜生っ…………。」

寂しがるなんて俺らしくねええええええ……！

「……未来、何してんだ？」

暁文が入つて來た。

「ああ！？……なんでもねえよ。」

「それならいいんだけど……腹減ったよ。」

「あー……解つた。」

ゆっくりと暁文に近付く。

「……ところで未来、飯はいいのか？朝も昼も食べてないんだろう？もう夜だし……。」

「ん……食欲無い。」

「そう言つな。逆に不安だ。……ちょっと待つてみ。」

「え、あ、ちょ。」

俺が止めるのも聞かずに、暁文は寝室を出て行ってしまった。

……なんか、寂しいな、1人つて。グレイはさつき帰つたし。

「1J—ゆー時は……。」

俺は携帯を取り出し、とりあえず電話帳を開く。

「ど・ち・り・こ・し・み・う・か・な……」「ちちだ。」

番号に電話する。

数秒後、相手が出た。

「もしもーし！ 未来ー！」

「……相変わらずハイテンションだな……陸。」

「そりゃあ、姉から連絡来たらテンション上がるだろー。……で、要件は何？」

「要件は……無い。」

「は？」

「だから……まあ、寂しかったから電話した。」

「え！？ それだけで電話したのー？ ……未来が寂しがるなんて……これ、雪でも降るかな？」

「お前なあ……俺だつて寂しがることぐらいあるつづーの。これでも一応電話する相手迷つたんだからな？」「詫で。」

「もう1人は誰？」

「夏子。」

「夏子つて確か……あー、赤崎夏子先輩か。」

「知ってるのか？」

「そりゃまあ、未来と仲のいい人つてのは一応チェック済みだし。「チェックつて？」

「あ、いや、な、なんでもない！ ……気にすんな！ ……」

「いや、気になる、言え。」

「ああー……お、俺、ちょっと急用が……。」

「陸ー？」

「…………そんじゃつ。」

直後、ブツンッという音がし、電話が切れた。

あの野郎……そんなストーカー紛いの事してたのか……いつかやってやる。

「未来、ちょっと来い。」

「未来が入つて來た。」

「…なんか、できたのか？」

「一応、余ったもので何か作つた。」

暁文についていき、リビングに行くと、テーブルの上には温められた夕食が乗つかっていた。

「あお……暁文って料理できるんだな…。」

「できるんだなって、以前も食べたことあつただろ。」

「そういえば、そうちだつたな。」

言いながら席に着く。

「…とこひで暁文、びりして料理できるんだ?…吸血鬼界で教わつたのか?」

「うーん…まあそつ言つ感じだな。」

「へー…じや、いただきます。」

俺は両手を合わせ、箸へと手を伸ばした。

欲求

「うわそりやまー。」

再び両手を合わせ、食器を片付けた。

「未来ー、腹減ったよ。」

「解つたよ…つたく。」

暁文は俺に近付き、抱きしめた。

「……未来、あまり無理すんなよ。」

「別に、無理なんてしてねえよ。」

「そうか? ジヤあちよつと無理な吸血してもいいんだな?」

「え? あ、いや、そづ言つ意味じや」

「じや、いただきまーす。」

暁文は勢いよく歯を突き刺し、更に勢いよく歯を抜き、吸いついた。
「痛つ…!! お前つ…。」

直後、物凄い勢いで髪が伸び、性別が切り替わった。

「ちょつ、暁文、性別変わつたつて、暁文!!」

背中を叩いて訴える。

「ん……解つた。」

暁文は私を離した。

「あんた……もう少し優しくしてよ…。」

「それもそうだな。以前瀬夏から怒られたし。」

「え、あんたが、瀬夏に? …情けなつ。」

「情けないとは…心外だな。」

「だって、あんたと瀬夏、10歳以上も年離れてるじやん。」

「そう言いながら、私は玄関へと移動する。」

「ただけど…つて、未来、どこ行くんだ?」

「マンションの屋上。ちょっと風に当たつてくる。」

「だったら、俺もいく。飛び降りされたら迷惑だし。」

「誰も飛び降りたりなんかしないっつーの！……」一人で大丈夫だから。んじや。

さつさと靴を履きかえ、家を出た。

屋上到着。夜風が涼しい。

手すりに寄りかかり、景色を眺める。

夜景が綺麗だ。

「ふー……。」

「……はあ。」

駄目だ、綺麗な夜景を見てもため息が治まらない。
本当に寂しい。帰ってきてほしい。

「瀬夏ー、帰ってきてよー…。」
思わず呟いた。

その瞬間

「僕がどうかしました？」

聞きなれた、懐かしい声が後ろから聞こえた。

歓喜

私は、ゆっくりと振り向いた。

そこへいたのは

金色の髪、白い肌、そして、ピンク色の瞳の、青年だった。

その姿は以前とは違い、背はほとんど私と大差無いくらいまで成長してはいたが、それでも、あの優しげな顔は、忘れたことがない。

「……瀬夏？」

いつの間にか、私の声は涙声になっていた。

「はい。…お久しぶりですね、未来さん。」

清々しいほど綺麗な笑顔で、瀬夏は笑つた。

「……瀬夏つ……」

目から涙が溢れ、足の力が抜けてその場に膝をついた。

「未来さん、大丈夫ですか？」

瀬夏が走つて私に近付く。

「瀬夏ーっ！」

思わず抱き着いた。

「わっ！？」「あ、あの……」

瀬夏はどうしたらいいのかわからず、困惑してこらえようつだ。

「おかえりっ……瀬夏……」

泣きながら、そう言つた。

「……ただいま、未来さん。」

優しげな声で、瀬夏も答えてくれた。

「……それにしても、背、随分伸びたね……。」
立ち上がり、改めて瀬夏を見る。

「私が今159だから…157くらい…?」

「大体そのくらいですね。」

確かに、天使は”愛”で成長するらしいから……。

「…私は、瀬夏が家を出していく前に、一度、頬にキスしたことがあるんだけど……もしかしてそれで…ここまで？」

「ある意味そうですね。」

「ほ、本当に…?」

「…はい。天界向こうで何か嫌な事があつた時は大体それを思い出しても乗り切つてたんですけど、そしたらこうなりました。」

瀬夏は恥ずかしそうに答えた。

…そりや、私、瀬夏が家を出していくまで一度も瀬夏の気持ちに気付かなかつたからな…仕方ないと言えば仕方ないけど…。

「…何はともあれ、また会えて嬉しいですよ、未来さん。」

そして、こう続けた。

「僕がいない間に、随分と色々あつたみたいですね。紅丞さんのことか…。」

「えつ、どうして知つてるの?」

「実は、天界からずっと、未来さんの様子を見ていたんです。」

「ま、まさか、半年間ずっと?」

「はい。」

「…マジで?」

「マジです。」

な、何それ……プライベートもあつたもんじゃない…。

「…あ、で、でも、お風呂とかは見てませんからね?」

「当たり前でしょっ、見ちゃまずいっつーの。」

…じゃあ、夏子や、陸の事も解るの?」

「はい。赤崎夏子さんと、津谷陸さん、ですよね。あと、田比野綾子さんの事も。」

綾子の、事……。

「……あの、もしかして、触れちゃまずかったでしょうか。」

「え？あ、いや、そう言つ事じゃないんだけどね……も‘瀬夏なら解つてるとは思つけど……聞いてくれるかな？」

「はい。」

私は、これまで起きたことを瀬夏に話した。

「食人鬼、ですか……すみません、やはり専門外ですね……。」

「そつか……やつぱりカラスを待つしかない、か……。」

「すみません、お役に立てなくて……。」

「いや、平気。瀬夏がいるだけでも、随分変わつてくるから。おかげで、こうやって元気が出たんだから。」

「それなら、役に立てて嬉しいです。……それで、あの、未来さん。僕から一つ、伺つてもよろしいでしょつか？」

「何？」

「……僕、また未来さんの家に居候してもよろしこうつか？」

「私は大歓迎だけど……今、私の家はここじゃなくて、紅丞さんの家なんだよね……だから、紅丞さんから許可貰わないと無理かも……」

「そう、ですか……。」

瀬夏の表情が暗くなつた。

「あ……安心して、瀬夏！私の完璧な話術で押し通して見せるし、それが無理なら『ごり押し』って方法もあるからーー！」

瞬間、瀬夏が吹き出した。

「『ごり押し』って、それは駄目ですよ……あははは……。」

「わ、私、本気なんだけど……。」

そういつでも、瀬夏は笑いっぱなしだった。

……なんとなく、綾子にマフラーをあげた夏子の気持ちが分かつたよつた気がする……。

歓喜（後書き）

先日、未来が夢に出てきました。内容を簡単に言つならば、「未来が瀬夏を探している場面」が夢に出てきました。もつ私駄目だｗｗｗ

「　　といつわけで、瀬夏が帰ってきたのー。私は意氣揚々と暁文に瀬夏を紹介（？）した。

その後、とりあえず家に帰つて話をしよう。と書かれていたところなり、今に至る。

「”噂をすれば陰がでる”つてことわざは本当なんだな……それが瀬夏の話をしていたところだつたんだ。」

「あ、それ、天界から聞いてました。……ついでに、暁文さんの吸血も、毎日かかさず見てましたよ。」

「え、マジで？」

「マジです。僕があれほど注意したのに、暁文さんときたら瀬夏の瞳が見る見る赤くなつていぐ。そして……

「　　いい加減にしてくださいーー未来さんは道具じゃないんですよーー? 何度言つたら解るんですかーー?」

瀬夏が、怒鳴つた。

瞬間、暁文の身体がビクッと強ばつた。

「い、ごめん。」

「僕じゃなく、未来さんに謝つてくださいーー。」

「わ、わかったよ……本当に、ごめん……未来。」

「い、いや、別に私は気にしてないからいいけど……。」

つか、本当に情けないな。25になつて10歳以上も年下に説教されているとは。

しかし、瀬夏はしばらく会わないうちに大人になつた。すぐ泣かな

くなつたみたいだし。

「瀬夏、私はもう大丈夫だから。
とりあえず後ろから頭を撫でる。
で、でも……。」

「……とにかく、瀬夏、おなか空いてない?
あ、空いてます。」

「じゃあちょっと待つてて。何か作るから。
とりあえずキッチンへと向かつた　。」

いれから的事　その2（前書き）

作者も未来も暁文も迷走中

「これから的事　その2

綾子の件があつてから、未来に元気がなかつた。

そんな今、瀬夏が帰つてきた。これは何かの運命かもしけない。

「……瀬夏、ちょっとといいか？」

とりあえず瀬夏を寝室へと招いた。

「暁文さん、どうしたんですか？」

「その……綾子の事、知つてるのか？」

「はい。見てましたから知つてます。先ほど未来さんからも聞きました。」

「じゃあその……食人鬼の事、何が解つたりしないか？」

「……すみません。未来さんにも訊かれたのですが、食人鬼は専門外なんです。」

「そうなのか……。」

「……ところで、暁文さん。」

「何だ？」

「その……未来さん、綾子さんの事で相当ショックを受けているようだ……。」

「ああ、さつきも泣いてた。……信じられるか？あの未来が泣いてたんだぞ。」

「信じられませんよ。未来さんはそんな弱くないはずですし……でも、それ以上の”何か”があつたんでしょうね……。」

「……俺たちで何とか出来ないかな？」

「気持ちちはわかりますけど……これは、僕たちが関わっていい問題じゃないような気がします。」

「放つておけって言うのか？」

「そう言つ訳じゃないんですけど、なんというか……これは、未来さ

んと綾子さん、そして綾子さんの中にいる食人鬼 椿さんの問題です。

僕たちは多分、今以上この問題に踏み込んだじゃいけないような気がするんです。」

「…………わかった。」

「それにしても、驚きました。暁文さんも、人を思いやることがあるんですね。」

「皮肉のつもりか？」

言いながら、寝室の扉を開ける。

「別にそういうつもりじゃ」

なんて会話を交わしつつ、俺と瀬夏はリビングへと戻った。

次の日も、綾子からは連絡は来なかつた。

……なんか、逆に不安だ。今すぐ綾子の声が聞きたい。

朝、暁文に血を引くと、寝室に行き、俺はとりあえず携帯から綾子に電話をかけた。

……出ない。

「綾子……。」

音沙汰なし。これ以上に不安な事はない。

会いに行くべきか？

でも、俺は昨日、綾子に拒絶された。

心が深く、傷ついた。

「ああー……。
また涙が……。」

「おい、未来。」

直後、暁文が寝室に入つて來た。

「つてお前、また泣いてんのか。」

「え?……ああ、まあ……何の用?」

「用事話す前に、涙拭けよ。」

「いや、止まんないから垂れ流しでいいやと思つて……。
「お前……自暴自棄になりすぎ。」

暁文は自分の袖で丁寧に俺の涙を拭ってくれた。

「ん……ありがと。で、何の用……?」

「グレイが、お前に話したいことがあるつて。」

「グレイが俺に?……なんだろ、カラスの事?」

「そうみたいだな……つていうかいい加減泣き止めよ。」

袖で丁寧に涙を拭いながら、暁文は呆れたように答えた。

「……ごめん、俺、男の状態で泣いたことそんな無いから、どう泣き止んだらいいかわからんない。」

「涙止まんねえー。」

「……つか、今まで言えなかつたんだが、未来って男だと結構童顔

だよな。泣いてるのが絵になる。「

「それコンプレックスだから一度といつな……。」

「いや、俺は童顔は結構タイプだぞ?」

「……は?」

驚きのあまり涙が止まつた。

「何でもない。グレイが待つてる、行くぞ。」

暁文はさつと歩いて寝室を出てしまつた。何なんだあいつ……。

高藤（後書き）

暁文良くわからん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3651ba/>

性別人間と食人鬼

2012年1月10日20時49分発行